

南下浦中学校
本年度の重点に対する評価

令和2年度 重点1

本年度の重点	1	○ 自ら主体的に学ぶ生徒を育てる。
目標（評価規準）		① 授業に粘り強く取り組んでいる。 ② 「見通し」をもって授業に臨み、単元終了後、丁寧に「振り返り」を行っている。 ③ 家庭学習が定着する。
重点に係る現状 設定理由		学習に対する目標を明確化・具体化し、その意義を踏まえながら向上心をもって粘り強く取り組む生徒の育成を家庭との連携のもとでめざしたい。

評価資料	評 価
教職員アンケート結果 （具体的方策ごと）	○ 94%の教職員が「生徒の主体性を促す授業づくり」で肯定的な評価をしている。 ○ 「家庭学習」については、4月～5月の休校期間中に、学年ごとに課題の量を教科間で調整しながら生徒に課した。83%の教職員が、成果が上がったと回答し、過去3年間の中でも高い水準となった。 ○ 「より質の高い学習姿勢を育むため、授業での学習活動の内容や形態、学習方法の指導などの工夫・改善について」については、94%の教職員が肯定的な評価をしている。
各アンケート等の結果	○ 「授業に意欲的に（粘り強く）取り組むこと」については、学年が上がるにしたがって、肯定的な評価の割合が上昇しており、学校全体としての肯定的な評価（89%）も過去3年間の中で微増している傾向が見られる。 ○ 学年が上がるにつれて「家庭学習」に取り組む習慣ができていますと評価する生徒が増えている（1年：45%、2年：58%、3年：78%）。また、学年が上がるにつれて家庭学習に取り組む習慣がついてきていると評価している保護者が増えている（1年：40%、2年：52%、3年：62%）ものの、生徒の意識とはやや乖離が見られる。
自己評価結果 （見解と改善方策）	○ 重点目標の第一に掲げており、校内研究としても取り組んでいることで、学校全体としてよりよい授業づくりに向けた意識の高まりが見られる。 ○ 今年度は、コロナの影響により研究授業や研修会を中止としたため、それぞれの実践に関する情報交換が他の取組から学んだり、新たな工夫などの情報が得られなかったりしたことで、十分な取組ができたとは言いがたい。 ○ また、新学習指導要領に示されている「主体的・対話的で深い学び」の実現をめざした授業づくりや、新たに三観点となる評価の具体についての研修は十分であるとは言えない。 ○ 新学習指導要領でも示されている「学びの意義」を生徒たちにしっかりと実感させることや保護者に対してもこれから求められる「主体的・対話的で深い学び」の実現をめざした学習指導やその評価についてしっかりと説明する必要があると考える。
学校関係者評価結果	新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、学校評価委員会未実施
最終改善方策	○ 新学習指導要領に示されている「主体的・対話的で深い学び」の実現をめざした授業づくりや評価の具体についての研修は今後もさらに深めていく必要がある。学校としての組織的な校内研究と、先生方個々の教科指導・授業づくりについての自己研鑽をともに充実させ、授業力を高めていくことをめざしていきたい。 ○ 全体としては、生徒の家庭学習への取組が課題であると捉えている。 ○ 新学習指導要領でも示されている「学びの意義」を生徒たちにしっかりと実感させることや保護者に向けて、これから求められる「主体的・対話的で深い学び」の実現をめざした学習指導やその評価について丁寧に説明をする必要がある。 ○ 年度当初に配付している「持ち物一覧」に加えて、学習のポイントや家庭学習の仕方などを示していくこと、また、1年生から学年が上がるにあたって、生徒の実態を踏まえながら、段階的に家庭学習の指導方法を変えていくことなど、少しずつ具体化していく方向で検討を進めていく。 ○ 家庭への情報提供については、通信類、授業での説明やプリント、保護者会や三者面談、教科相談等々の機会をより有効に活用し、学習指導や授業づくりに関する理解を深めていただくことができるよう努めていきたい。

本年度の重点に対する評価

本年度の重点	2	○ 一人ひとりに高い人権感覚を身に付けさせ、道徳的判断力・実践力を養う。
目標（評価規準）	① 礼節をふまえた、時と場に応じた言動をとる。（挨拶・言葉遣い） ② きまりの意義を理解し、これを遵守して、学校の秩序や規律を高めようとする。 ③ 集団の一員としての自覚と奉仕の精神を持ち、協力的な言動をとる。 ④ 暴力や暴言、いじめやからかいが許されない環境ができています。 ⑤ 自己の価値を見出し、自己肯定感をもって生活できている。	
重点に係る現状 設定理由	常に人権感覚を持ち、これを磨きながら、他者理解と自尊感情にもとづいて自他を尊重し、寛容や助け合いなど、豊かな心を持つ生徒の育成をめざしたい。	

評価資料	評 価
教職員アンケート結果 （具体的方策ごと）	○ 「礼節をわきまえ、時と場に応じた言動がとれる態度の育成について。」の設問では、個人ではCと回答した教職員がいたものの、全体として、また成果としては肯定的な評価が100%であった。 ○ きまりの意義を理解し、遵守して学校の秩序や規律を高めようとする態度の育成について」の設問では、経年変化をみたときに、A評価の率が減少傾向(H30:44%、R1:38%、R2:35%)であることが気になる。学校全体が落ち着いてくる中で、生徒への要求レベルが上がってきているともとらえることができる。 ○ 「集団の一員としての自覚と奉仕の精神を持ち、協力的な言動がとれる態度の育成について」の設問では、経年変化で、成果が上がったとはとらえられない結果となった(H30・R1:100%、R2:89%)。大きな行事がなくなったことで「集団の一員としての自覚」を促す機会が減ってしまったことが大きな要因であると考えられる。
各アンケート等の結果	○ 生徒アンケートでは、「時と場に応じた礼儀や言葉遣い」、「きまりの意味を理解し守っている」、「周りの人に対して協力的な発言や行動」の設問に対して、どの学年の生徒も概ね90%が肯定的な回答をしており、また、学年が上がるにつれて上昇している。学校が再開した6月当初は、感染症対策が最優先されていたこともあり、1学年生徒には「きまりの意義」を指導する機会が減っていたことが、1年生のC、D評価の多さに表れていると考える。保護者のアンケートでも、生徒と同様、各学年とも概ね90%が肯定的な回答であった。 ○ 「暴力・暴言・いじめ・からかいが許されないと自覚して生活できているか」の設問については、生徒の肯定的な評価が90%を大きく超えている。保護者アンケートでは、肯定的な評価が80%を超えているとはいえ、学校の取組についてまだまだ厳しい評価をいただいている。
自己評価結果 （見解と改善方策）	○ 新型コロナウイルス感染症の影響で、6月から学校が再開したものの、合唱祭や3学年の修学旅行・2学年のキャンプ・1学年の春のイベント、3学年の卒業遠足など、集団の一員としての自覚と奉仕の精神を育む機会となっていた多くの行事が中止とした。4つの小学校が集まってきて新しい仲間との人間関係づくりをはじめていったり、中学校生活を送るうえできまりの意義などを当初の段階から指導するべき1年生には、こうした行事の中止による影響が、顕著に表れたアンケート結果と捉えている。 ○ しかし、全体としては、生徒の意識が高い水準で維持していることがうかがえる結果となっており、安心・安全に過ごすことのできる学校生活を構築できていると考えている。 ○ 今年1年間を振り返り、反社会的な問題行動についての事案はなく、生徒のほとんどは、概ね落ち着いた学校生活をすごすことができた。
学校関係者評価結果	新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、学校評価委員会未実施
最終改善方策	○ 多様な個性を尊重し、互いに認め合っていくという意識・感覚の醸成は、昨今の社会において大変重要な視点となっている。学校の教育活動においては、教職員自らが人権感覚を常に磨きながら、生徒に「公的な人」としての言動を指導していく必要がある。 ○ 生徒は、「暴言、暴力、いじめ、からかい」が許されないということを自覚している。学校内で直接「暴言、暴力」を振るうケースは減っているものの、SNSトラブルなど、匿名性を利用した学校外での問題行動は増えている現実がある。 ○ SNSは、便利である一方、人間関係が円滑にいかなくなってしまうきっかけを作ってしまうケースもある。人とよい関係性を保つためにも、「表情が見えない相手とのコミュニケーション」ということをきちんと意識させることが大切であると考える。 ○ SNSの危険性や発信に伴う責任を生徒だけではなく保護者も含めて意識していくことが必要な時代であるので、今後も、家庭と学校で連携をしながら情報の扱いに関する指導を行っていくことが必要だと考えている。

本年度の重点に対する評価

本年度の重点	3	○ 自らの社会的自立に向けた生き方を考え、基盤となる能力や態度を育てる。
目標（評価規準）		① 社会的な自立をふまえた望ましいコミュニケーションと集団生活ができる。 ② 自己の特性を理解し、学校生活の諸活動に生かそうと努力する。 ③ 学校生活における諸課題に対し、具体的に解決を図ろうとする。 ④ 将来の生き方を見据えながら、情報収集や学習に意欲的に取り組む。
重点に係る現状 設定理由		自己の個性や特性を正しくとらえ、将来の生き方を見通しながら、望ましい集団生活やコミュニケーションができ、諸課題の解決を図りながら、社会的に自立していける生徒の育成をめざしたい。

評価資料	評 価
教職員アンケート結果 （具体的方策ごと）	○「望ましいコミュニケーションと集団生活」についての設問では、成果について、Cと評価した教職員が少なくない(18%)。コロナウイルス感染症対策のため、給食時の黙食や、休み時間中のソーシャルディスタンス、授業中でも活発な言語活動を行うことができず、生徒同士のコミュニケーションを促すことができなかったと感じている教職員が多い。 ○「自己の特性を理解し、学校生活の諸活動に活かそうと努力する態度の育成について」の設問では、経年変化でもAと評価する教職員が少ない(H30:28%、R1:29%、R2:18%)ことが気になる。生徒一人一人のよさを発揮する機会となる行事が中止となってしまう、そうしたアプローチができなかったととらえている教職員が少なくないのかもしれない。 ○「学校生活における諸課題に対し、具体的に解決を図ろうとする態度の育成について」の設問では、経年変化でも、肯定的な評価が大きく下がっている(H30:94%、R1:100%、R2:88%)。コロナ対策については、トップダウン式の対応を迫られた。「自ら具体的に課題解決を図る態度」の育成よりも、「示されたことを着実に実行に移す態度」を求めることが精一杯であった。
各アンケート等の結果	○「コミュニケーション」に関する設問では、保護者の肯定的な回答は、経年変化で減少した(R1:84%、R2:80%)が、生徒の肯定的な回答については上がっている(R1:87%、R2:92%)。生徒の回答については、コロナの状況で話し合う機会が減少したとはいえ、その中でも意見や気持ちを伝え合うことにしっかりと取り組んだ成果であると考えられる。保護者の回答では、全体で80%が肯定的に評価していただいた。 ○「課題解決」に関する設問では、経年変化を見ると、A評価や肯定的な評価が、少しずつ上がってきている(H30:83%、R1:84%、R2:86%)。コロナ感染症対策という具体的な課題にしっかりと対応しようとした生徒の様子が見えると考えてもよいのかもしれない。保護者の回答では大きな差異は認められなかった。
自己評価結果 （見解と改善方策）	○ コロナの影響により、生徒同士のコミュニケーション不足を実感している。行事が少なくなってしまう、教員主導の場面が多く、生徒自らが考えて行動する場面を設定することができず、失敗から学ぶことも少なくなってしまうように感じる。 ○ コロナ対策がトップダウンとならざるを得ないため、生徒自身がその解決策を考える余地がなく人任せとなってしまう、コロナ対策だけでは限らないが、自己解決能力の低い生徒が多いように感じる。 ○ とはいえ、全体としては、このコロナの状況に教職員も生徒もよく対応して生活ができたと思う。
学校関係者評価結果	新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、学校評価委員会未実施
最終改善方策	○ 来年度も同じ状況が続くことが想定されるため、様々な場面で意識的に縦のつながりが生まれるような機会を確保することが必要であると考えている。また、可能な限り、生徒主導の活動を取り入れていくことにしっかりと取り組んでいきたい。 ○ ここ数年、卒業生の進路先が高校進学ほぼ100%（技能連携校等も含む）という現状もあり、キャリア教育に関わる内容が、高校進学に特化したものが中心となっている現状がある。「進学指導」の重要性をふまえつつも、今年度2学年ではじめたSDGsの取組などを軸に、総合的な学習の時間を大きく見直し、遠い将来に向けた生き方を考えさせることについて、さらに充実・改善を図っていきたい。 ○ 昨今の県立高校改革計画や入試制度の変化等に関し、生徒はもちろん保護者にも、保護者会、面談、通信類など、随時情報提供を丁寧に行いながら取組をすすめていく。